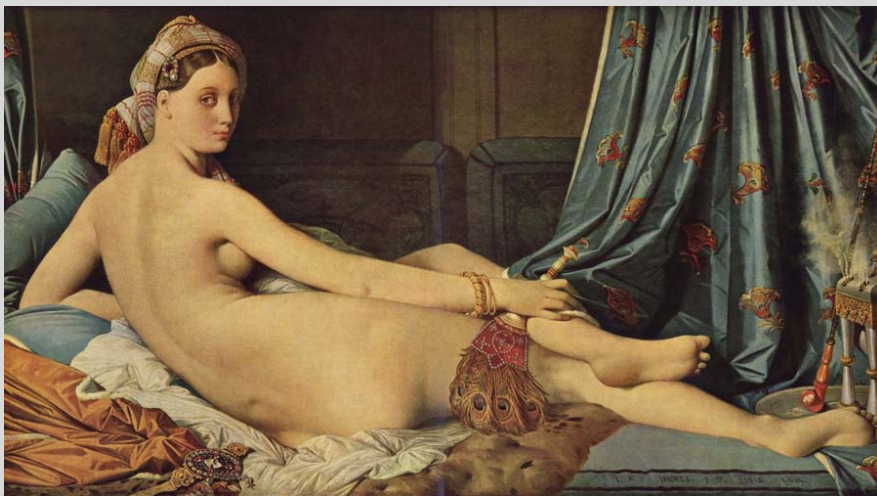


②ルーブル美術館



ルーヴルの歴史 城塞から美術館へ

12世紀末に誕生して以来、ルーヴルは常にパリの中心的存在であった。当初町の西端に位置していたルーヴルは、町が広がるにつれて、次第にその中心へと呑み込まれていく。それと同時に、うす暗い城塞は、フランソワ1世の近代的な邸宅へ、さらには太陽王の豪華な宮殿へと変貌を遂げるのである。その後、1793年に美術館となりました。



『[グラン・オダリスク](#)』(横たわるオダリスク) 1814

この作品を観た人々は背中を向けた裸婦を、冷静に観察すると胴が異常に長く、

通常の人体の比例とは全く異なっていることに気づく。同時代の批評家からは「この女は脊椎骨の数が普通の人間より 3 本多い」などと揶揄され、アングルが自然を忠実に模写することよりも、自分の美意識に沿って画面を構成することを重視していたことを示している。

感想：この画家は、正確さよりも理想の女性像を追求し、独自の美意識を加える事により、やがてそれは時代を超えて認められたのです。

たとえば、それが現実とかけ離れた姿でも・・・

部門別の収蔵品

美術館の収蔵品は、[古代エジプト美術](#)、[ヘレニズム彫刻](#)（ギリシア盛期のローマン・コピーを含む）、[古代ローマ彫刻](#)、古代オリエント美術、[中世](#)・[ルネサンス](#)・[バロック](#)・[ロココ](#)など各時代のヨーロッパ諸国の絵画などが充実していることで知られている。なお、近代（19世紀後半 - 20世紀前半）の作品は国立[オルセー美術館](#)、現代の作品は[ポンピドゥー・センター](#)に収蔵されている。

展示は、古代オリエント部門、古代エジプト部門、古代ギリシア・エトルリア・ローマ部門、絵画部門、彫刻部門、工芸部門、イスラム美術部門、グラフィック・アート部門に分かれ、この他に中世のルーヴル城の遺構を保存した展示と、ルーヴル宮の歴史に関する展示がある。2000年からはアフリカ、アジア、オセアニア、アメリカの民族美術の展示も行われているが、この分野の展示品は[ケ・ブランリ美術館](#)の所蔵品である。

著名な作品



『皇帝ナポレオン一世と皇后ジョゼフィーヌの戴冠式』

フランス新古典主義時代最大のダヴィッドの傑作『皇帝ナポレオン一世と皇后ジョゼフィーヌの戴冠式』。629×926cm とルーヴル美術館でも最大級の大きさとなる本作品は、1804年12月2日に行なわれたナポレオンの戴冠式を描いたもの。

